



(独) 宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所
准教授 工学博士

山田 哲哉氏 (高35期)

1993年東京大学大学院航空学専攻博士課程修了。現在、(独)宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所・宇宙飛行工学研究系・准教授。専門は、再突入カプセルや、惑星突入プローブの熱空気力学、飛行力学、及びシステム工学。はやぶさプロジェクトでは、当初からカプセルの開発に携わり、オーストラリアの砂漠では実際に自らの手でカプセルを回収。最近「はやぶさ2」の他、高速帰還機の研究・開発に従事。

紫芳会事務局様より寄稿のご依頼を賜りましたものの、タイトルの「輝く先輩たち」には大変お恥ずかしく、相変わらずの劣等生のまま踴っている状況ですが、それでも後輩の在校生方々に何かの足しになることを祈って書かせて戴きました。(独)宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所の宇宙飛行工学研究系におります。再突入飛行力学、熱空気力学を専門研究分野として、再突入機のシステム開発、運用等もやっています。開発当初から携わってきた「はやぶさ」カプセルが7年の惑星間飛行の後、地球に再突入・帰還したのは5年前のことでした。後継機「はやぶさ2」は、多方面からの応援のお陰様で昨年12月に無事、打上げ成功に漕ぎ着けましたが、その帰還は2020年と、また大分先のこととなります。宇宙を往来する船をつくる少年時代からの夢は年齢とともにより具体化し、高校在学時代は大学で宇宙工学を学び、研究開発職に就いてそれを実現することを目指しておりました。宇宙を自在に往還する宇宙機、その点からするとまだまだ発展途上で、そして、いかに歩みの遅いことか。頑張らねばなりません。



豪州の砂漠にて

現在、大学院生に宇宙工学の授業もする立場ではありますが、高校在学時代、あまり熱心に勉強していなかった節があります。いや、熱心ではあったのですが、やはり大学受験という関門を眼前に控え、余裕のある勉強ができず、受験に出る／出ないのみが唯一の選択基準でした。宇宙プロジェクトを進めていますと、そういう狭い見では全く通じないのを目の当たりにします。問題にぶつかった時の突破口は、全く別の分野の知識からヒントを得ることも少なくないからです。学会発表は固より、様々な調整で海外に行く機会もあり、例えば、はやぶさカプセルでは、外国国土への『着地許可証』を得るべく、「国民・国土に与える損害の程度と確率が所定の値以下であること」を解析証明するよう外国政府から要求されるわけで、専門の飛行解析のみならず、英語交渉力、法律の知識、体力?等々を総動員し、文系・理系問わず様々な分野のチームメイトと共にまさに全力投球が求められました。プロジェクトを通じて学んだことは、個々の専門分野の深さ(もちろん重要です!得意なものを、より得意にしてください!)のみならず、チームワークと、困難に直面した際にあきらめずに解決策を見つけようとする姿勢の大切さでしょう。

二十数年来、立高を訪れておりませんが、清明寮での遠泳(今となっては毎週末4、5kmは泳いでいますが、当時は本当にきつく...)、ファイヤーストーム。他校にはない素晴らしい伝統だったと振り返ります。卒業してしばらくは、「遠泳できたんだから」が心の支えとなって、困難に負けず、前に進める気がします。ですから、各々が自身の責任を果たしてチームワークを大切にする心、困難に直面した時に負けない心、立高生にはそんな武器が既に備わっているのだと信じています。立高生の益々のご活躍を祈ります。